

リンドウの栽培に関する試験 根株の利用年限について

西村和明・豆塚茂実・川田 計

(大分県温泉利用農業研究所)

NISHIMURA, K., MAMETSUKA, S. and KAWATA, K.

Studies on the Cultivation of *Gentiana triflora* Pall. var. *japonica* Hara. On the Practicable Term of Rootstock.

リンドウは中部高冷地や東北の冷涼地で栽培されているが、近年九州の高冷地において栽培が増加している。しかし、暖地での栽培については不明な点が多く、導入するための基礎資料を得る目的で生育や形質の推移、根株の利用年限などについて調査したので、その結果の概要について報告する。

1. 試験方法

供試の系統はエゾリンドウ (*G. triflora*) で、1969年4月は種、9月に仮植し、1970年4月に標高500mの湯布院町塚原に定植、栽植密度は90cmうねに3条植、株間20cmとした。その他は慣行法にしたがって栽培し、調査は1972年より生育、開花、形質などについて行った。

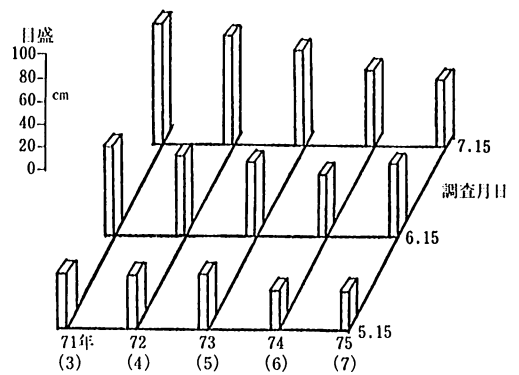
2. 果および考察結

生育についてみると萌芽は前年の秋に始まり、展葉は4月上～中旬で、その後の伸長は比較的速やかで7月中旬には個有の草丈に達した。発らいは6月上、中旬で、着色は7月中旬、収穫は7月下旬～8月下旬にわたる。株が古くなると多少開花が早くなることが認められた。草丈の推移は第1図のとおりである。実生3年目より収穫を始め、収穫初年は105cmとよく伸長したが、年の経過と共に毎年約10%程度ずつ草丈は短くなった。節数は多少減少する傾向であった。茎数は実生3年目は7.5本であったが、4年目には14本に増加し、その後は減少し7年目には8本となった。収穫本数および収穫物形質の推移は第1図のとおりである。切花長は3年目は105cmであったが、以後は漸減し60～70cmとなった。葉については葉長、葉幅とも小形となった。着花節数は7節程度で推移したが、収穫初年のみ10節であった。総花数、花穂長とも収穫初年が最も優れ以後は漸減した。収穫本数は

茎数の約半分を目安に収穫したので、最も多い収穫2年目で6.5本、最後には4.4本に減少した。根株については実生6、7年目に調査したが、6年目では健全株が約60%に減少し、欠株が目立ち始め7年目には欠株率が60%に達した。

以上の結果収穫初年は、農事試験場高冷地支場 (S32～36年) の成績と比較してもその色はないが、年の経過と共にすべての形質が漸次低下し、根株も欠株や活力の衰えが著しくなる。したがって、暖地における根株の利用年限は、実年より4～5年が限度と認められ、早目に更新する方が経営的にみて有利であると思われる。

しかし、株の中には実生より5～6年を経過してもなおおう盛な生育を続けているものも認められるので、これらの株をもとに暖地向きの耐病性の強い品種の選抜や育成が必要である。



* 図、表とも () 内の数字は実生からの年数を示す。

第1図 経過年数と草丈の推移

第1表 経過年数と収穫物の推移

経過年次	項目 切花長	最大葉		茎数	株当り 収本数	全節数	初花 着生節	着花 節数	総花数	花穂長
		葉長	葉幅							
長野県産	103.0	9.0	2.0	5.0	—	—	19.7	10.6	34.5	—
1971年 (3)	105.4	12.8	2.8	7.5	—	28.7	19.8	9.8	36.8	37.8
72 (4)	76.0	11.2	2.4	14.1	6.5	20.7	13.8	6.8	29.7	29.9
73 (5)	67.5	9.3	2.1	11.6	6.2	21.1	14.9	6.5	24.9	24.6
74 (6)	63.4	8.5	2.0	9.8	5.6	22.3	16.0	7.0	23.0	18.3
75 (7)	68.1	8.4	1.9	8.4	4.4	23.0	17.2	6.5	20.7	18.1